科学研究費助成事業（基盤研究（Ｓ））事後評価

課題番号	18H05220	研究期間	平成３０(2018)年度 ～令和２(2020)年度
研究課題名	蒙古襲来沈没船の保存・活用に関する学際研究	研究代表者 （所属・職） （令和３年３月現在）	池田　栄史 （琉球大学・国際地域創造学部・教授）

【令和３(2021)年度　事後評価結果】

評価		評価基準
	A+	期待以上の成果があった
○	A	期待どおりの成果があった
	A－	概ね期待どおりの成果があったが、一部十分ではなかった
	B	十分ではなかったが一応の成果があった
	C	期待された成果が上がらなかった

（研究の概要）

本研究は、蒙古襲来沈没船の海底における保存手法の確立、沈没船に関する情報公開方法の確立、引き揚げを前提とした大型木材の保存処理手法の確立という３点を目的としている。

（意見等）

第１課題の「海底における元軍船の現地保存手法を確立すること」については、複数の方法を試み、砂嚢と酸素不透過シートで覆う手法を開発した。酸素供給の活発な日本周辺海域に適した手法として評価できる。

第２課題の「海底での現地保存を図っている元軍船に関する新たな情報公開方法を開発すること」については、制作した三次元画像を松浦市に提供し、歴史民俗資料館での AR（拡張現実技術）や HMD（ヘッド・マウント・ディスプレイ）を用いた公開に結びつけているが、利用状況については不明である。

第３課題の「引き揚げを前提とした船体を含む大型木材の保存処理手法を確立すること」については、松浦市の施設改築の遅れがあり進捗が懸念されたが、世界で初めて自然エネルギーを用いた効率的な保存処理装置を開発した点は、高く評価できる。また、新型コロナウイルス感染症の影響で研究計画の変更を余儀なくされた中、当初に予定していた研究経費の使用計画を変更して、ドローンを利用した海底（水底）地形情報取得作業を行い、成果を出した点は評価できる。